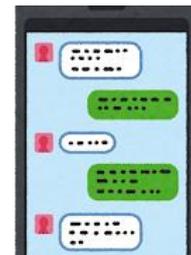


Vol.59 で会話と対話は目的が異なると書きました。会話はできていても、対話はできていないことがあるわけです。ではその裏、「会話はできていないが、対話はできている」は成り立つのでしょうか。さすがに最低限、会話ができていないと対話もできないだろうと思われるのでしょうか。これも、対話について考えるうえで興味深い問題です。

会話なき対話

Bさんはコミュニケーションの障害を抱えています。A先生は授業のグループ討議でBさんに合理的配慮が必要だと考えています。

A先生「討議に参加せず、レポートで代替することもできます」、Bさん「・・・」、A先生「もしくは討議に参加したいですか?」、Bさん「・・・」、A先生「レポートを①、討議参加を②としますので、後でご返事ください」、Bさん「・・・」。後日、Bさんからチャットで「②」と返事がありました。そこでA先生は、討議への参加方法(発言はせず、討議後に自分の意見やメンバーへの討論を文書で提出など)や、Bさんが討議で発言できないことについてグループメンバーにどのように説明するか、Bさんに提案してBさんの意向を確かめることにしました。(架空の事例です。可能な配慮は授業により様々です)。



対話の目的を再確認する

さきほどの例では、A先生とBさんの会話は成立していません。二人は言葉を交わしていないからです。

では対話はどうでしょうか。A先生はBさんの障害特性からして、自分がふだん期待しているような会話はBさんとの間では成立しないことを理解したうえで(違いを知る)、Bさんにも可能な意思表示の方法を提案しています。その結果、Bさんはコミュニケーションの障害があっても、討議には参加したいと考えていることがわかりました。これは双方にとって、障害特性と人格は別であることを学ぶ機会になったかもしれません。

対話の目的は違いを知ったうえでの相互理解です。それが会話を通して行われることは必要条件ではありません。対話の手段を会話に限らないことは、さきほどの例の通り、それ自体が合理的配慮の一つにもなりえます。

